詩

石炭を焚く

三川指導部　すぎもと　かずお

石炭を焚く

少々質が悪かろうと
硬が混っていても雨に濡れていても
かまうことはない
結構
家族四人が入る湯は沸くものだ

おれが
石炭を掘り出すヤマで働き
この街に炭鉱があるから
この国に
石炭しかないから
石炭を焚くのか

みそもくそも石油に食らいつき
鉄鋼も　電力も　化学も
巨大な煙突をつき出し
鉄の箱が海上をかけめぐり
蒸気機関車が消えて
コマーシャルをかついだ車が
ひしめき
ゼンソクが起ころうと
油づけの海になろうと
死者がわめこうと
いっこうにおかまいなしの
あつかましさ
まるで　この国に
石油の宝庫があるかのように
おえら方は
やっぱり石油がええわいといい
石炭はペケだという
かくて
エネルギー自給率一割弱
石炭を焚く
一割のうちの三割
その端数のそのまた端数
くさい臭いも

吐き出す煤煙も
また格別ではないか

石炭を焚く
燃えあがる炎
ぱちぱち　ごお
ぱちぱち　ごお
と、音をたてて

×

先に全国から広く募集されました〝第十三回総評文学賞〟作品コンクールで、三川指導部の杉本一勇（すぎもと　かずお）さんが、「詩の部」で佳作入選となりました。

この催しで三池労組から入選者を出したのは、これが初めてのことです。心から、およろこび申し上げます。

表彰式は、七月十九日から開かれました総評大会三日目の二十一日行われ、同大会に出席中の渋田書記長が杉本さんにかわって受彰しました。

杉本さんの、今後のご活躍をさらに期待しておきます。がんばってください。

なお詩の部での入選者は、杉本さんほか七人で、国鉄、私鉄、全電通、動力車、全逓、日教組などの職場で活動しているなかまたちでした。

大会宣言

生命とくらしを守る

労働者をきたえる反動政策

三池炭鉱労働者の統一をめざす闘いの道で、合理化によって生み出される労働者の権利にもとずく諸要求を組織して闘うとき展望をたしかなものにすることができる。

生命とくらしを守るため、長期抵抗統一路線の思想にたち、三池炭鉱労働者の統一をめざし、共にがんばろう。

一九七六年八月一日

三池炭鉱労働組合

三池労組の定期総会は、大会宣言を発表「生命とくらしを守るため長期抵抗の思想に立ち、三池炭鉱労働者の統一をめざし」、がんばって行くことを広く誓った。

（前略）七六春闘で経験したように、日本の独占資本が高度成長の破綻のなかで、ロッキード事件に見られるような、田中前総理の逮捕はまさに金権政治の腐敗しきった姿を露呈したものであり、彼らはこのような危機を予想し、必死になって自からの体制の弱点をとりつくろい、平和と民主主義を推進する中核的な役割を果たす労働組合に対し、思想的、政治的な弾圧を加えてきた。これに反撃するわれわれに労働者階級の主体制はいまだ十分とはいえない。

また、炭労の石炭政策春闘に見ても、守勢から攻勢へ、を基調に闘いをすすめたものの、第六次石炭政策にもとずく炭鉱労働者の生活を犠牲にした石炭産業合理化をハネ返すまでに至っていない。

それでもわれわれは独占資本の労働者ならびに国民を犠牲にした反動的政策は闘う労働者をきたえ、国民諸階層との連帯のなかで、革新的な前進をはかることを確認することができる。

とくにわれわれは本年六月十三日、組合結成三十周年、ならびに三池闘争十六周年をむかえ、長期抵抗統一路線の拡大発展を身をもって体験するとともに、ますます三池炭鉱に働く労働者の階級的統一をめざす闘いの重要さを痛感したものである。労働者の統一と、団結をめざす闘いの道で、合理化によって生み出される労働者の権利にもとずく諸要求を組織して闘うとき展望をたしかなものにすることができる。

生命とくらしを守るため、長期抵抗統一路線の思想にたち、三池炭鉱労働者の統一をめざし、共にがんばろう。

一九七六年八月一日

三池炭鉱労働組合

豆情報

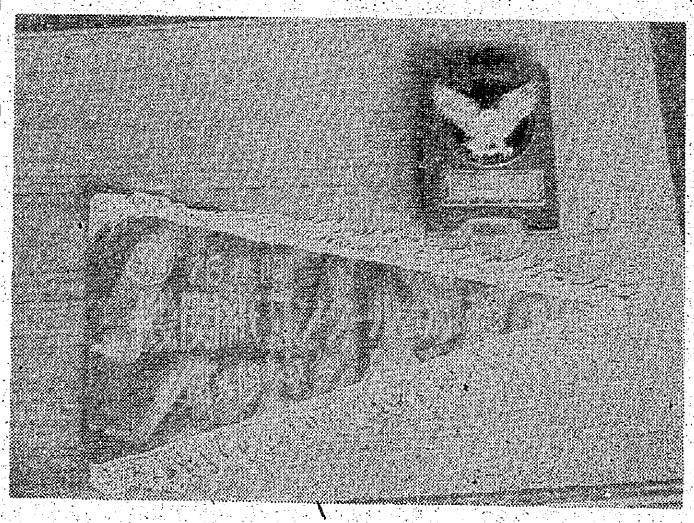
飛車（ロッキード）でミソつけ、角（田中）をとられた自民党。世論こぞって王手。

×

名ざされた〝灰色高官〟たちが告訴攻勢。ヤブをつつかれヘビを出す、長く暑い夏。

×

田中どまりでウヤムヤはごめん。政・財・官界の腐敗の根っこ、ととん引っこぬけ。



副賞の三角旗と楯

本紙が〝奨励賞〟に

機関紙コンクール（春闘共闘）で

別項記事で紹介した、杉本一勇さんの総評文学賞（詩の部）佳作入選についで、こんどは本紙〝みいけ〟が、さきに行なわれた春闘共闘委員会主催の機関紙コンクールで〝奨励賞〟を受けた。

このほど賞状とともに記念の三角旗に楯が送られてきたが、賞状は市川誠議長の名前で、次のようにのべている。

「みいけは、春闘共闘委員会が行なった七六春闘の機関紙コンクールで、その企画と編集技術が評価され、入賞されました。よってこれを賞します」

これまで本紙は同コンクールに毎年出品してきたが、この種の賞を得たのはごく稀れで、これは何といっても、全組合員、主婦会員、そのほかのすべての読者のご協力、とくに編集委員会に結集しながら、直接本紙を支柱としてささえている各編集委員の努力によるもので、いわば体制の成功ということができよう。それだけによろこびもひとしおである。

こんどの前進のために少評を紹介すると、簡単ではあるが問題点をするどく指摘している。

「きびしい合理化攻撃のもとで歯をくいしばって苦闘している三池労組の不退転の決意が行間ににじみでています。とくに三池労災の原告団レポートには胸をうたれます。

紙面づくりの技術面では多く工夫の余地を残しつつも、闘いを組織する機関紙として読みごたえがあります。がんばってください」

本紙は、この頃とみにふえてきた投稿でだんだん紙面が埋まるようになってきた。これこそが本来機関紙の命でもあり、今後投稿活動がいっそう強まることが、受賞にこたえる道である。これまで以上のお力添えこそおねがいする。

熊本地労委に提訴

三池合板労組会社の態度許されぬ

ねばり強く闘う三池合板の仲間たち。

かねて工場の一方的閉鎖に反対してねばり強く闘っている三池合板労組、および共闘は、去月八日ついに会社側を「不当労働行為を行なった」として、熊本地方労働委員会に提訴した。これによって同合板の工場閉鎖・首切り問題は、ようやく社会的な視点から照明が当てられることになった。

十七人の組合員はますます家族ぐるみの団結を固めながら、今後は物品販売活動なども合わせ、闘争資金づくりを進め、闘いをひろげて行くことにしている。

合板労組の訴えによると、昭和四十五年四月には会社は〝みなつき会〟を発足させ、「従業員相互の親睦と共済を目的とした親睦会」と称して、労働対策に乗りだしている。

それにもかかわらず労働者は、ひそかに組合結成準備に決起。

しかし、それはすぐ発覚、圧力を加えはじめてきた。

一面、酒席に労働者の一部をさそい、労務政策の浸透に乗りだしてきた。

昨五十年六月、ついに三池合板労働組合結成に成功。団体交渉を開始。生活改善をめざして立ち上がる。

同年八月、一部組合幹部、組合員の、有明地区労との接触がはじまる。

同時に一部の積極的な組合員に対する差別が目立ってくる。「生産阻害者」というわけだった。

右のような不当な会社のやり口を積み重ねながら、今年の三月三十日、突如組合三役に工場閉鎖、全員解雇を通告。重大な段階にたちいたったのである。

さて、熊本地労委の動きは、七月二十七日双方代表を呼んで、まずそれぞれの事情聴取。きたる十七日第一回の審問開始を迎え、その足どりも具体化して行く。三池合板労組、それをささえる共闘の今後に対する期待は大きい。

×

組合員・家族、それにCO患者守る会の皆さん、みんなで三池合板労組をはげましてゆきましょう。

場所は、「荒尾市大島字新四山町」です。